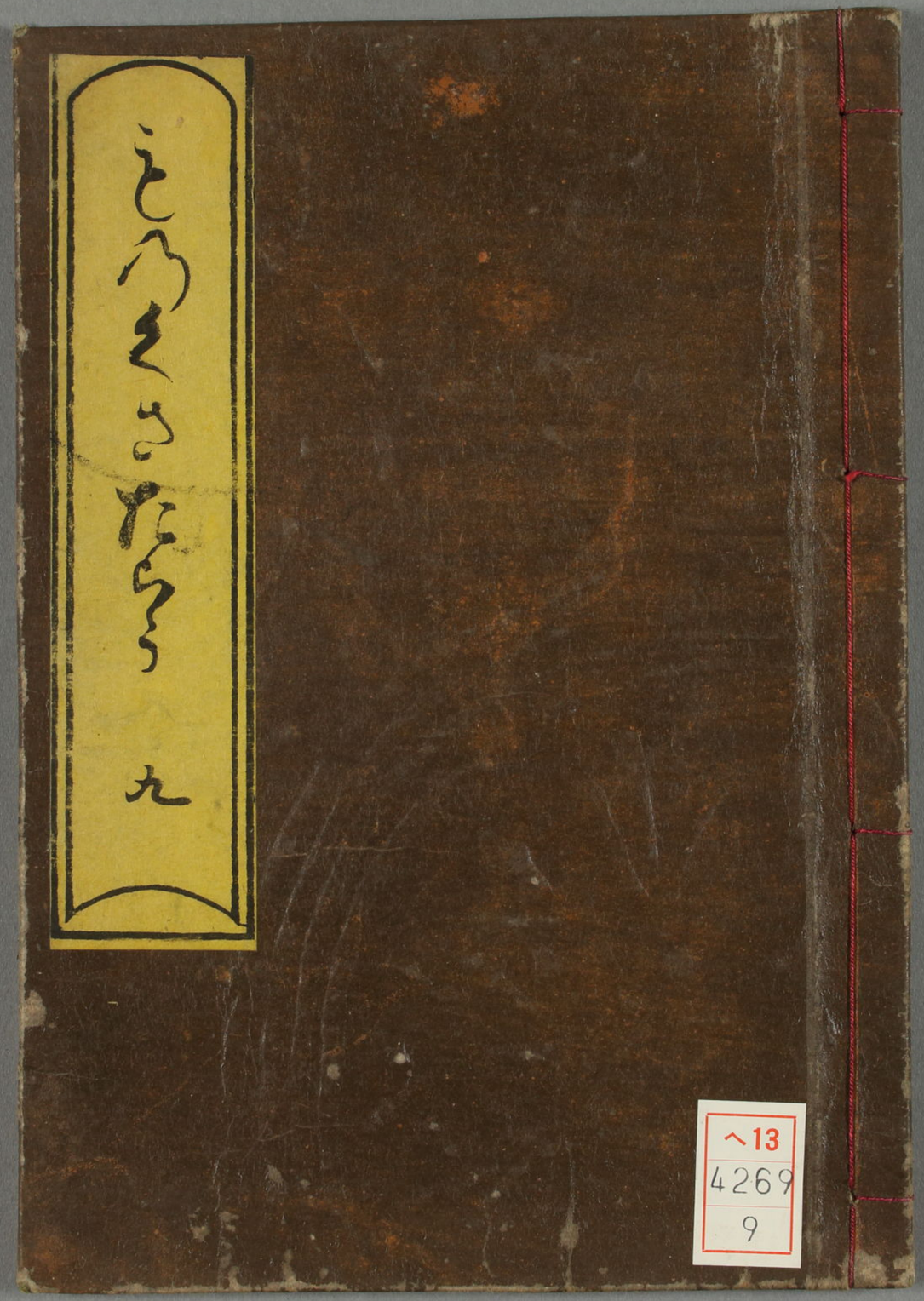


へ13
4269
9

八13
4269
9

森義史氏

91-2154

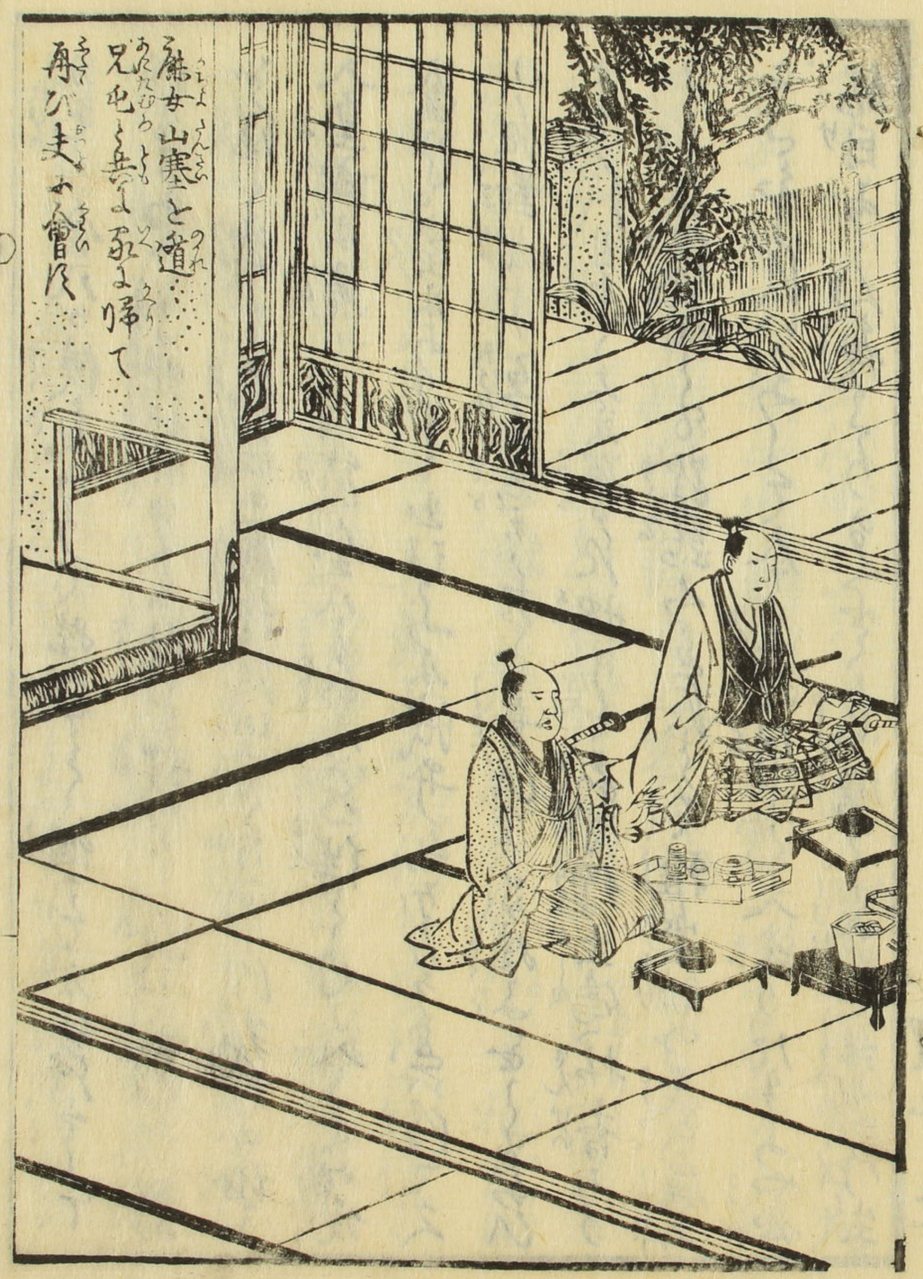
物草太郎巻之九

貪花少年詭詐計

第十七回

説謎閨媛逃遁術

凡人一生の中或は張或は散ぐ會合常ならぬもあるべし浮萍の風に浪に西東せるよりも仮りそめに流れ流れて遂に死に別れ兄妹と東西に分れ漂泊して思ひ設けぬ廉の山中に迷ひ対面して廉女は紀孩丸あり……兄は文字屋金八が周済に暁典身代かし烟死せしかば情人雅楽助が方へ代柯に成りて嫁したる一件なども詳細に説話る


熊女山塞と道
兄也と無よ取よ帰て
舟び夫か會尺

みもも金八が俠氣あるて煙よりく個まで水を代をして
移もてゆくる照管家も財を拾んで氣と家んでゆる
と澤く鄙ゞ勢江の路程代經くはるに幾月の程
入皇城み着しつべ箇金八がるみ水を往くに入るみ村境
金八も室みあるく出ちるみ滅毋屯ちるべ法て文
しに對面しるる恙ちと喜びるる煙をしるみ
事本代見くく大家窮に憐くく前日行生鴻拒香あり
しる後者も路路ちるべして雅楽助の憂慮大
うるべいるて今ゞ縁同ゞく入るたまるや如
縁目あんに煙くるるく焦燥ちるに屯家が行生

洲までの歸路途中ゞ賊に遇ひ法者と報害せられ
煙に一個行集の中鳳凰乃山塞に拉ちるべ代
物草ちる郎の板活をるくく山塞代逃るるくまき
屯錯く物ちる郎ちるを京く仔細ゞ一五一十を活
況ちる金八ちるべ国くまゞ差ちるを役く雅楽助
に報告ぐるるゞ妻ちるを方付く屯代管待さ
くに大速ゞ套代扇に引紙て出ちる却況雅楽助
ち妻麻女作生洲拉来ちる家に聞ちまゞるべ六人を
下に奇くて其ゞ方代ゞ求くあるべでも其消
息ちるるくるべト水河八竜水治ちるべも其使ちるべ

そこなふことゝ西山の鬼谷先生の万書の書に孤
獨六合の造化に畳く吉凶を決するの
明鏡の妍媸とかゝる明白なるいぎ法く孤乃半に
問ふ鬼谷先生の庵あるこゝに問ふ鬼谷
先生黙算して白注者とゝみ命に表ひこゝで這
女子いまゞ氏に俗ゝ神助ありて日ふゝに問ふ
んこゝに雅楽助と名乗る消息
氏求めあゝに金八未くゝ屋女兄弟乎に己が家に問ふ
半ゝあるゝ佛女の山寒に拝ひあゝこゝ兄妹逢ふ
あゝ始末審にこゝ雅楽助ゝ言葉乃ゝ

して歓喜ゝ銀ゝ氏聽屋女をひとゝ兄氏も徒ゝ
て始ての名渇ゝ甚欣々喜酒ふ祝氏的ゝ乃ふ却流も
浅乎氏々物草太郎ゝ支氏思ゝ忌ゝ半あゝ氏金八
ふ野ゝ嘆嘆して物草ゝ武技氏蓋ゝ伯ゝで再び
名渇氏なゝでゝ房寄ふ勤司氏ゝ乃ゝ
べての消息ゝ銀ひるゝ金八も氏ゝ甚技氏瘡貴ゝ
乃半あゝべゝゝ乃手段あゝ孫ふゝ房
時あゝ便宜氏需ゝ折聽ふ伯州ゝ半ゝ孫
ふあゝ孤廓ゝ乃ゝ用ふ三屋氏ゝ打ゝ氏
ゝ同半用ゝ乃ゝ氏も乃ゝ幹半いでゝ

技藝の國くりうろうよりつまづく再會の孝代孟ぐ
て月日代清嘉ろ氏却統物草吉郎と吉竹壹岐守
ゲ奔く孝代郎の傳蘆ル四りあくに亭ろふ渭て白
皇城と鄙野ルすくろ婦女みしくしくしくもふ
の形容村婦里女くく行ふくうぐ羅人甚くろふ
我信例ルなくくく日明勧勉くゆく皇城く上りふべよ
く羅殊とも年くりくく云くれり我曜夫ケ三ぐ一
個の京娘ルを結ル四くやくふなり郷くなよ計
求人くるくくたまりてく拝くうぐべくくをくくりり
熟ろ個る親御の暮くしケぐたくものくあくく匿咲乃渭

皇都とよりの来たりて銭く奪ル負く躰をふ世ぐ天
仏のごル國をとも薄くるくりといた物草吉郎嚢
中より洲銭十數元くろ出くく亭主ル遍くくこうくく
聘尚の代くくくくくくよこうよ汲じめ拳家
のくのくくかるる孝深ルもなるるのよ戯弄て頑奕て怒
出来くくくくくなるこのの十八日ル清水大悪の縁りて拝書
びくくくくくケ中ルく撰択てはぐくとるぐくくと云くれば
野人くくル意的くくりて討尚くくはぐくくくル拝書のはぐル来
るくる女の眉目好を這くル意て云ル況く帰るケり這日ぐくくる
ルの桜くくりくくくくくくくくべ物草吉郎名喜ケる面て咲吟

傳蘆あく
物草の
瓶飯を
戯弄

兎も角実にかくこそ皆くちんで議ぜられたれ
さば野合代なるんと日は消と期して十八日のもうめ
新く准備をして整點其拵を作法布の衣の垢ふまうれ
おるまで齷齪しく淫よせる色を人伯も分雑り葉素
と常の半個の奴截し屐とられた班竹の杖と推の人め
は午八日主風烈しくのこる宮ふ鼻涕代ちうて清水
の徒門の前に到頓然し結ちく又開五指て待等ふと
指者の人くこの半地代てあふ竹〳〵何とまちく個いあう
はるぐ皆易徒として呂ても接近のいさふ〳〵尊た
賤しき老る弱た雲のごく震のごく絡繹てひきもきく代

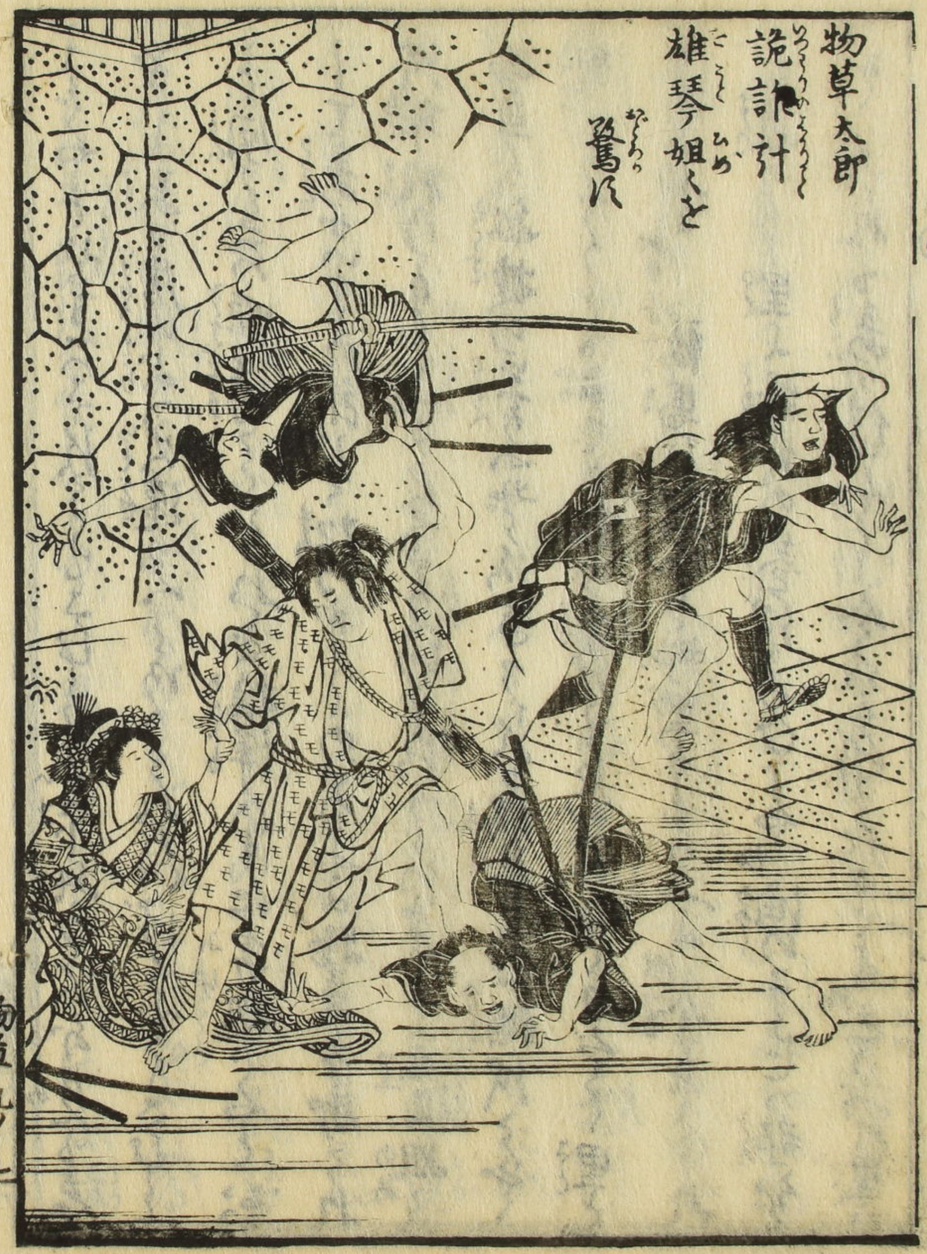
或々十七八をくちうち代女五人十人ら那くの写しも一注
目ちう又見る半ふく個く記まうれこちう飯食代もるこ
斜陽虞渕に浸すぐ衆多の女代幾ちとふ数さく走ると
ちふ徑し目撃しが佳人のちふ〳〵もいぐぐ〳〵で眺と得く
蜀代珍のかう〳〵あるいび紅面美くうとも形容ちうれた
容止〳〵奇整ちうで早世箇ちる異〳〵とたあ〳〵ひいちう〳〵ふ
清神気の鴻〳〵見ちく〳〵ちう十七八ちうちく〳〵ちの新ちせ
[illegible]たとちうふの数ちこなふ原よちの形〳〵車ゆる
屋山の西施楊貴妃の彼ちうとふれよ代びありやてま〳〵ちえん
めふ浸代の佳人ちう楽事と浸ふほ〳〵と徒行ふく歩ちたまふ

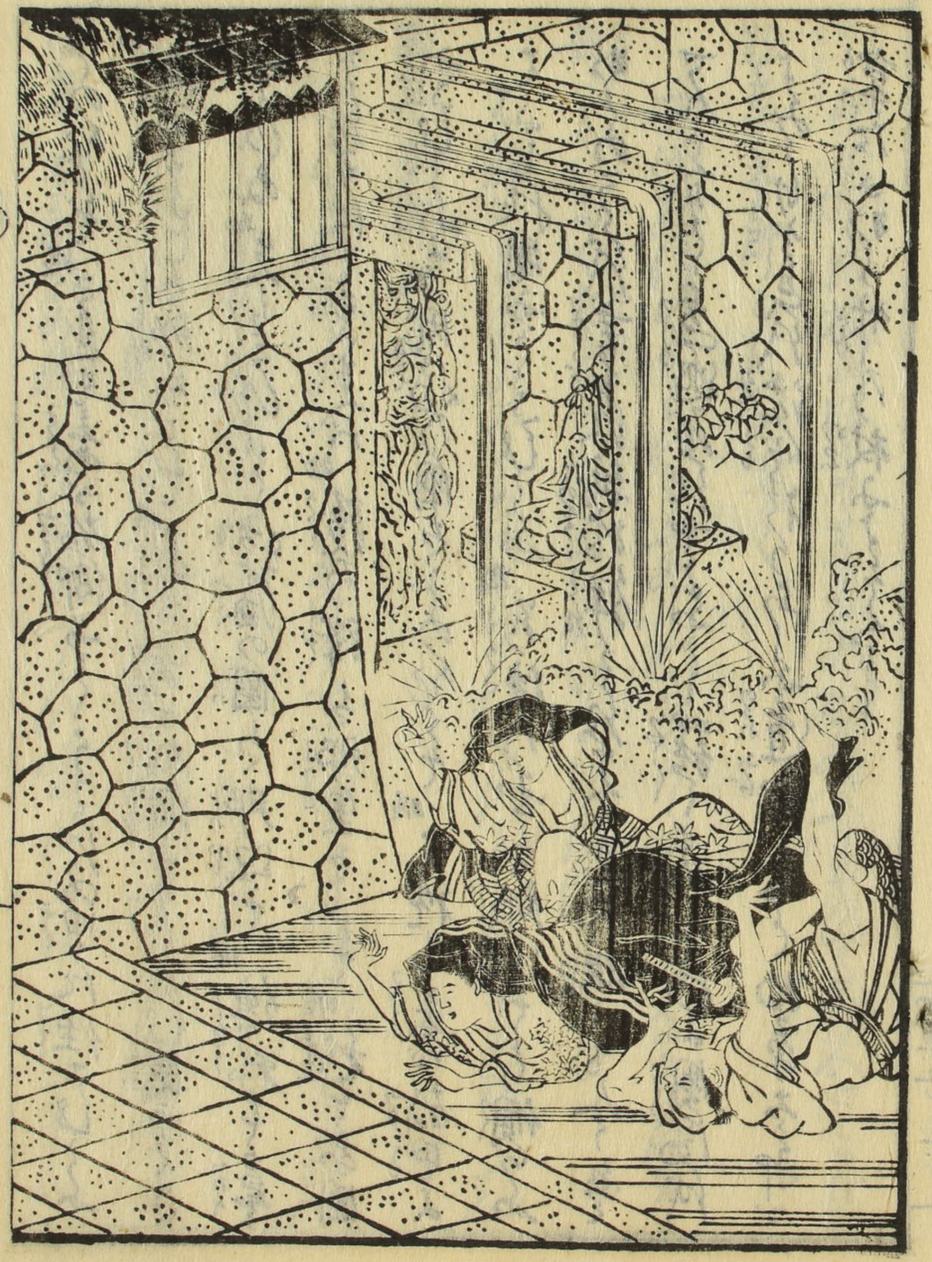
蓮池のほとりなる[illegible]を
の待遇[illegible]
[illegible]髭二人を召[illegible]
武士轎夫[illegible]この後者跟隨[illegible]
[illegible]物草太郎[illegible]
野合の[illegible]
姐[illegible]物草太郎が手[illegible]見[illegible]
その[illegible]髭が目[illegible]
[illegible]物草太郎[illegible]
[illegible]

前後左右代圓位[illegible]物草太郎ふ
[illegible]二三人を屯倒[illegible]
[illegible]轎夫を頑[illegible]
[illegible]
一團の烟[illegible]
[illegible]
面[illegible]武尺[illegible]
[illegible]物草太郎に切[illegible]
[illegible]身を側[illegible]
[illegible]刀の下緒[illegible]
[illegible]の士[illegible]

ほろりとなみだでんつるてんし 扨(さて)も物草太郎は姫(ひめ)に對(むか)ひいふや
吾妻(わがつま)と見えたるに姫はそれたゞ呆(あき)れてうなづく東西(とうざい)しれずて
て言(いふ)の得(え)のきまらん往来人(ゆきゝびと)の詑(?)言(しらうらうゝ)是非景氏見えてあふ
懼怕(おそれ)ひもしやとはしそれでも唯(これ)おゝく勸拜(とうさん)とする老(おい)ふし
物草太郎はとうけめくらかありちや吾妻あたるうたふ
かゝく二かく東山(ひがしやま)の老の宿北野(きたの)松(まつ)の下(もと)家田(?)年過
むかし御ありしといふをやしる所に姫は資性(しせい)頴悟(えいご)なりしかば
と聞(きく)より後(のち)にての者(もの)をいふさ日ごろも郷下(いなか)の中くおろかなと
事(ごと)ならずの戯弄(ちやうろう)て野合(やがう)なりやとかへつてこれを真(まこと)なる
てゝれ筆(ふで)動(うごか)しなるそうかとのうて男(おとこ)のいはゞそれのことかと賤(すう)

さぞやしと思ひまゐらせしもさむらん目下(いま)此(こ)なそれが見(ひとめ)志
ある妾が居所(いまゐるところ)へ火速(いそがせ)たまへしなりふれべいはゞかくさむらふ
と問(とひ)たまへば啞聾(をしつんぼ)せくそれを推量(あんりやう)ひまに寄逃(?)て おか
して妾がいまだ所(ところ)を松(まつ)の下くのさるふよ物草太郎これ
気散(きまゝ)に松乃りくいこゝろそろはしおちらの事うし云(いふ)よ姫(ひめ)は
物草が俗様(ぞくざ)の其(そく)宗(?)にせず流されが偶然(ぐうぜん)その一個(ひとつ)なりき
聞知(きゝし)りたらうとも争でか餘(よ)の言(いふ)なりとしめんと目ぐらす里(さと)
のなまへ 物草独言(ひとりごと) 鵜馬(?)乃深山(おくやま)も那里(どこ)ぞとふぞよ 姫 今あてこれ
も過(すぎ)ぞし里(さと)よ燈火(ともしび)の巷(こうじ)なるぞよや 物 油(あぶら)のこうじは那(どこ)なるぞ
ぞ 姫 お爺も妾が往(すみ)てし今はそれなるさとよ 物 きのふれ里(さと)は


物草太郎
詭計
雄琴姐くを
驚ル



どのかどぞ 姫 こゝも吾妻が故郷にくらぶるの里に住よしや

物 続のこゝろじろ那かどぞ 姫 此も吾妻が故郷よりくさむ國にくさ

むかしの 物 光るこひよく渡海の國を那辺で 姫 傳粉をる嶋

なれらだしのさまへ 物 鏡乃鐸を那里なるぞ 姫 秋を家國

ふさむるふよ 物 周梅乃國でどのかどぞ 姫 この後も吾妻が故里よ

なるも是國にてさむるふ 物 吾が後乃むを那辺ぞし 徊のふ

わらのこゝろ 言に鈍坊鉾を年月をまへ 姫さも今無

やんをべかく 奇遁でに出でし 羅くのこる好を國風成

よみけるも沈作りふ 道逃でやと 物草太郎が

拿たるかりの 杖にまかせて

うら布成杖に腰をつくるみのなれが身のはてをとゝる

物草太郎これを聞て

万代我行のよゝれそふ 遊しそへつ 行よふてまゐる 流れ

姫くらふよく 鉾をを子も似げる風流なるよしと

なるおせし 此の小とあれまげれば これ子をとゝる道 物草見

物草太郎 みなし

かたりこのあとれでとかんは まげるなるを渡としければ 子とや申さん

姫いかがして 奇遁でやとて 手をかゝるん

ぶりやうとひても 手せ 袴の 橋乃むすれの門

物草太郎この鉾を沈思みつひ 此こそをとゆるあけるぞせ

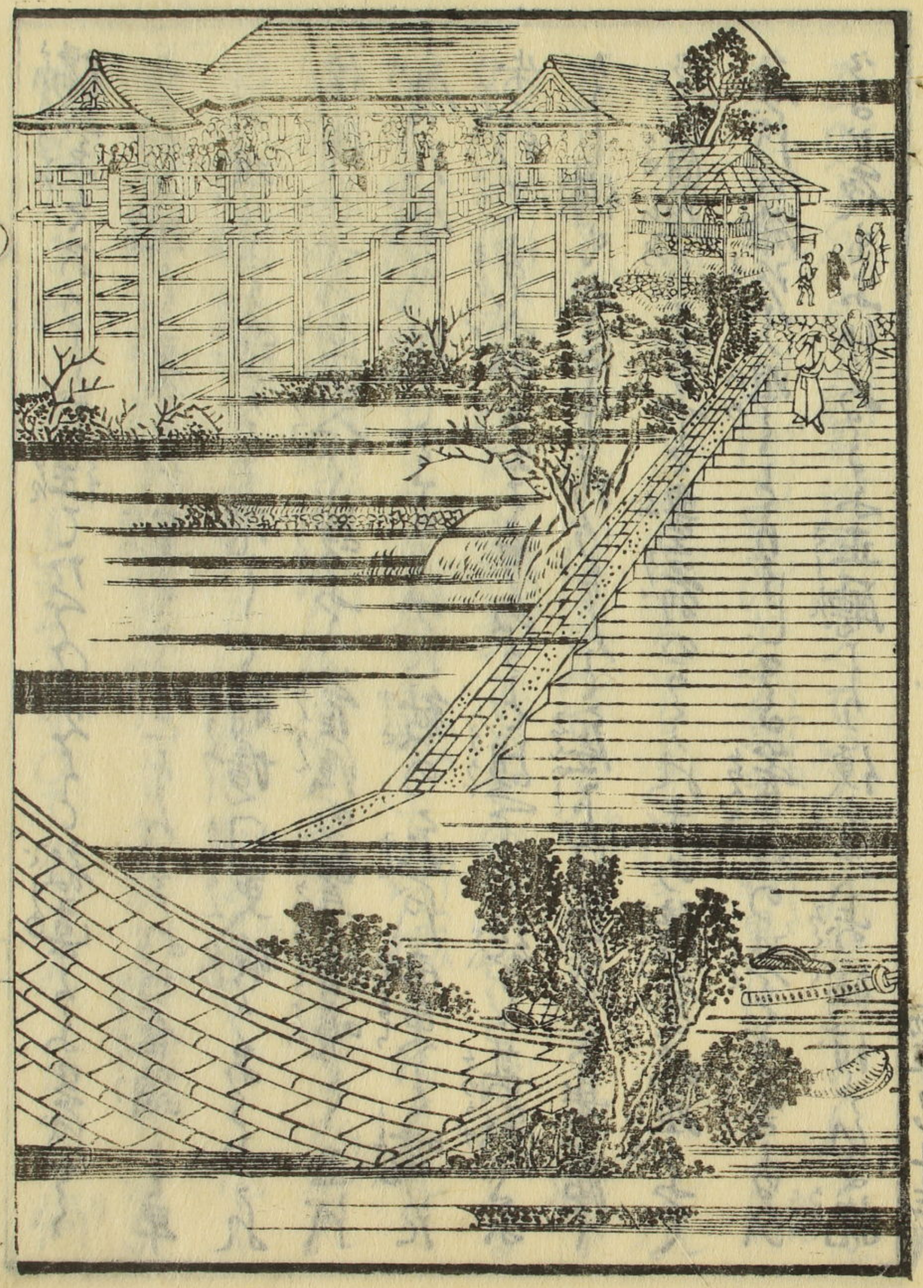
ぬうちふ〜表衣をもぬぎたてゝ〜ともぬぎめぐ赤
脚みく道迦のひる物草を郎あふ行〜代妻那里
へうよりをつ〜ゝ〜所の杖豆ゝうふあつゝ〜追
迂ど来風の伏ゝふよ猪のゝ花〜ゝて翻飛つぐ
ゝよ踪と見〜ゝつひゝ徒べ物草を郎ゝ如猪め碎〜
てゝ生ゝうる

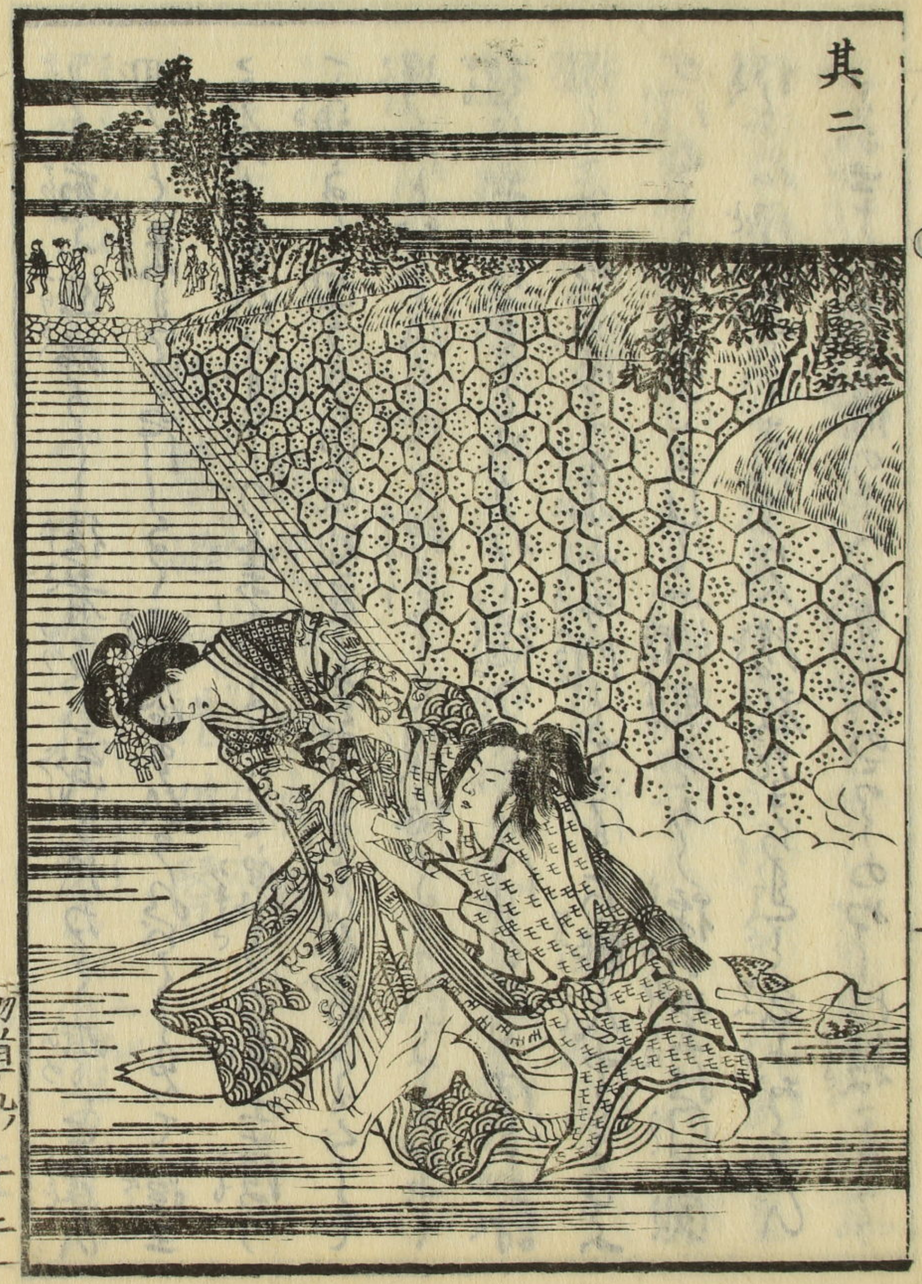
第十八回

瘋顛児朗吟秀歌
雄琴姫歎惜破琴

部伝姫ゝかうふて立條の橋乃辺で迦のびひ

〜ふ前ふ迦婦ゝ〜後者ゝの武士ゝ〜姫と奪ひ
回ゝと来ゝる所〜濱合のひゝ〜ゝ〜ゝて侯生
ゝ他〜のひゝ〜ゝて乗垂ゝ衆ゝの武士蒲ゝ
て難ゝく回ゝのひゝ物草を郎をゝ〜ゝ妻をぐゝて
婦ゝんとゝふ〜ゝに〜ゝて慎悔ゝもうひゝ〜げふく
想ひ出ゝたることゝゝ〜ゝ猪の柴ゝ門とゝふ討
回ゝくゝゝふゝゝる茅ふ守門〜ゝて〜ゝ節人ゝくゝふ
ゝ門ゝゝゝゝてゝゝふ郷里をゝ猪の柴ゝ門ゝ刻
ゝゝぬ那里ゝくゝゝゝ搭教たゝ〜ゝ〜ゝふゝゝび
ゝふ士ゝゝを七條のゝふ豊ゝゝのゝ〜ゝ殺ゝゝ




其二

橘姫をあらしで往てたづのひとり見てと教章ふ笠代さ
みゝく往く見まゝ宮もさとりうれば雀踊して早
三ふ姐くふまてるこゝ恨して時境門更時うあふこれ
侍侍し裏高ふ入く胡ふ笛絃の聲清喨く玉代
麿沢金代舗しこゝろけに紘の庭代西東と嘯に
歩行て寛家をおとやぬうと胡くく絃く其影ぶふ
ゝ倘も出ることゝもゆうけんと座下に志のひく身を絶く
ゝる箇姐くゝふゝを豊前のうゝれ主の達愛れ姐くゝて
名代ば雄琴姐くゝりしゝる笛絃の琴と琴しるひ
るゞ夜もふけぬゝふ正聽ゝり便室く歩欄ばふひよ挽

ふ児ゝゝるゝ丁鬟代ゝさくていまゞ月出さのあゝも
あと清水みその浮ふみさいうふ烏玉の晴黒にゝゝとふ扇
合ケべ家もゆくしゝるゞのゝ夏ゝいまくゝ角でうゝれ
まで来ゝある車のさひゝうんやゝ云よ扇草ゝ郎座下
ゝう跳踊いでゝ如何ふ秋妻ゝゝるゞゝゝゝゝゝはゝゝある
ゝゝ歩橋の上へあゞりゝゝゝと明くゝる侍婢もたゞ氣も
口もゝでゝゝ帯踊く浜門のゝゝくゝゝゝゝゝ呆れ
ゞゝゝ瞳も魂も身ゝゝゝゝゝ秋の秋ふ姿ゝゝ沈く
てあゞゝゝゝふゞけゝゝゝゝく扶くくゝゝふゞ働ありてゝふ
懼怕のゝゝゝくゝゝゝまて来るゝゝゝゝ倘

武士ふの夜ふけん中を渠氏お殺さんもひんをしさぶ
きぶん女を立淳三ーむお罪ぬるとを今夜だうう
を伺ふ〜〜ふ〜〜やぐーて曉よ巡邏の見へぬ間ふ賜て
疾やれて席薦をたびく侍婢をて言めを云夜
曙巡邏の武士ち見へぬ間ふ後く町ててある妻戸
の際う郎〜めう物草を郎を朝早う通をふ
ふ〜〜ふ飢疲倦てあ〜〜ふ行ふ〜〜ふ後ふ〜〜と奉
中で等待ふ〜に栗柿粢と搗げふ入く志〜ふ力
ふ〜〜ふ〜〜ふ出〜〜ふ物草を郎ふ〜〜を見て行ふあち
ま〜ま〜ふや姐くの容色ふを仰氏數品の景氏文重ふ

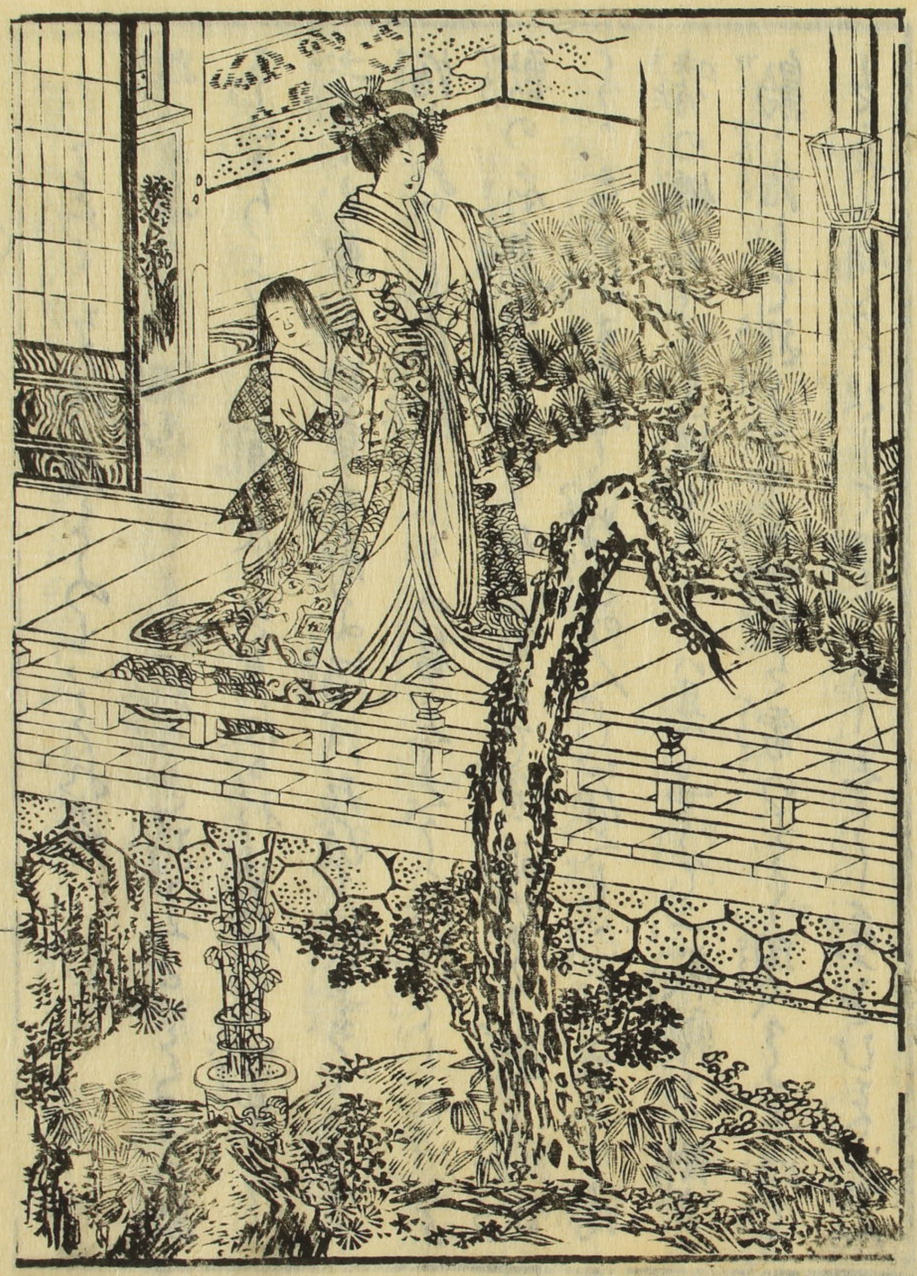
盃ふ〜ふ檀紙ふ入ま〜て〜れよぐ〜牛馬ふ〜ふのと〜て〜ぐく
ふ一個ふ〜て〜ふ〜て〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
め菓ふ〜ま〜ま一個ふ〜〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ栗氏ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ言ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ

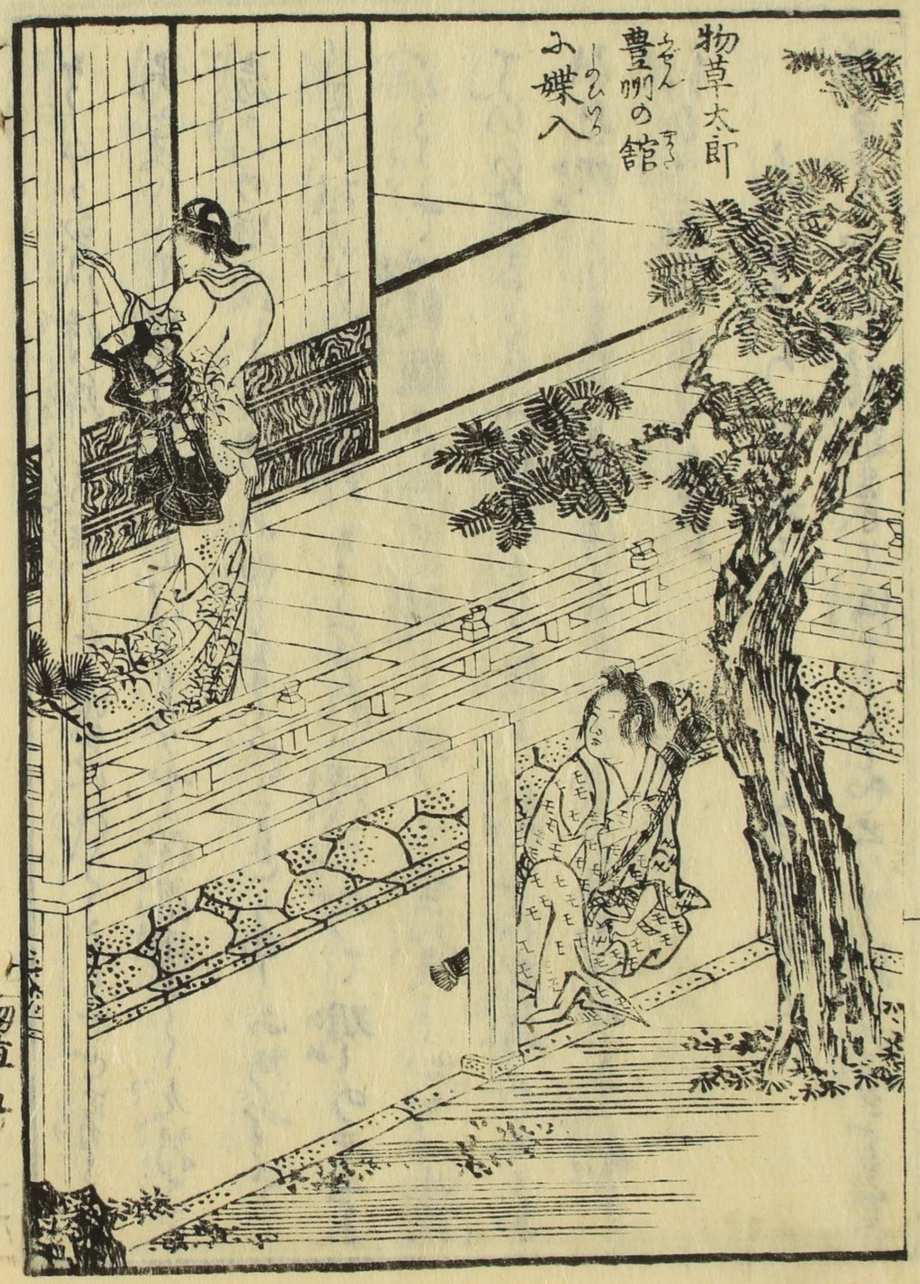
行くやうと思ひるるが水茎の跡ちんくに代でうつ
んけーんとあるー

あるあ娘うに代はひよたひうに紙をやーうとそうあ
うにうにうに書かうるるに姐くこれを見るあるに鳥あるーの
猫はてうに言の切けるあ代感じ驚に側る賤ーに身ふく
其ふるく紳清ちる官位あるんあるも涙ちうるこ尾
扇ふうにけ代神ちどの作野ちまで今ちたうる
ーかるに代に待蜂ふ家ーて初草ち郎を迎搖ーめ
烏帽ふ直書と半てこれをめてこるこうるふ初草
ち郎ち家ふあ代ち代で肩ふうけてこうーく

ちけるあ代侍蜂ノ家一味ーて業に代くうるとち家せ
あるーて姐ーの使ーるけるふ位法国ふーに九郎ちで
歳ふの壊路ちこちをあるこちーひうるーうあ代ぶうー
ーるふ校のうに武あ代ちーにぶれい滑不脚て姐ーのまふ
ーるーて一軟輪ー作ふ倒ーー姐ーの宝貨ーおりーめに
てび代まるーるふ琴の上ーく跳ー琴をい移碎ふてこふ
ひめ姐ーーうに代見てるあんーーるるぐーてて聞ー
紅ひきちーてうちん

今ーりうち五ち秋ちぐーみうるあるせん
物草ち郎ノ肥将郎素て歳ーーるせひん姐ーの方ちて




物草太郎
豊明の館
ふ蝶入

[illegible]のもいとゝ[illegible]
姐[illegible]翻思してすの襲を猶なるとゝるの致
さゞまりおろ〳〵周べ今〳〵[illegible]
土器〳〵[illegible]物草太郎より酒代たびたれば書くら嚊の
酒をゝんぐゝ代飲ゝ[illegible]の島をゝぐゝ[illegible]やいえる
獣の前身ふやゝ[illegible]ゝ[illegible]独酌ひゝら飲て清水
ゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]の人〳〵[illegible]ゝ[illegible]て酒
嚊の解あゝつゝ姐〳〵のゝゝい見も中て一軽輙と例と
鳥ゝ[illegible]して郎ゝゝゝる郷音ゝ雷のゝゝ周ゝゝゝふ姐〳〵
ゝ夜も明ゝゝ起して問ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ん

を惟と下して侍婢と共ふ閑廂の方へ去りゝふ却て出
草太郎を立更の風身ゝゝて一時眠とさゝ〳〵左側
と見ゝゝゝ姐ゝも侍婢も行〳〵ゝゝゝゝ獨ふ踏沈て烏帽子
真無代撞りゝて座ふ跳下ゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝふ檣壁とのゝゝ何處ゝも行〳〵去ゝゝ個て婢女乃
ゝゝゝ〳〵て姐〳〵便宜に浮ふ洩入〳〵ゝゝれば甚上言葉
前辛苦の身ふ入ゝれゝゝ辛苦仗節守潔なれば
不倫不例の動辞をゝゝ〳〵ゝもゝゝ〳〵ゝゝ自然
ゝゝゝんゝゝゝ配を意んゝゝゝゝて姐〳〵の便宜と
宜のゝ頃ひのゝゝふ帳宜の下ふ冠衣ゝゝ脱下て姐〳〵ゝ初

人数ならんべの屋敷のようすとりあつめ珍しく世間の
噂迄ものいせかりしなんべ又君姫様御ひとり屋の仮宅
お深び入りとのうの仮宅のもの
に紅とちらして今を盛りの花菖蒲清水
拾香の道の勅撰ようの和歌の草子郎が志のびあり
武蔵巡羅の武士ざるなんべ渠代暴れ打ちこれ
めく早晨とく遣ようめ遣中のようとをとせる
お仰げの花弥ようめるふ爰て酒をすびたるふいたく
弾奏たる形状の奇怪なるなんの仮
宅ふまりたるなんべ俳諧仲間の仮

宅門を開くあるて遊歩の路たるなんべ第の中ふあるふ
らん拠素てようく武士ふ寄ってく隅ト中て題書て
ろふ踏だふ見くざるといやんをたるくてこふるうこるあるふ
を所ら論歌の計ふくはるくを清みどおるひを歩まぬ
郊遊雅琴の調くくやるるハ法まんるる国をみく清あを
場所の御風ふ魔けるくく面をを玉と磨をせるるど
ようく遊曲ふ手ようて勢ようを賞のわるるうう時てくくを
縁ようを書かくくを和漢の文をどとうく酒くて清歌と名
を之のひるんべ子母の孫を笑いと踊ようくふるを居の左府ぬ
くくをの絃を弄て屋敷豊おのちふくせのひくくと左府の

奢侈起居せし代見をして其身を穢んとし代々をまくまた
假托しまうをでるこのまなびしられと責て染ひみんるまと
或めくしみ宇股清水拈香の時夜飄然子に穢されめひめと
乃浮と聞てきくしまた想のくせりしみ又飄然子嚇されく
櫻掻のひめとて遂み幸意のたく宇治右馬の求めと云ち
語ひをまかく聞えし

物草太郎卷之九終